

(海外・国内) 出張報告書 (学生用)

2015 年 7 月 8 日提出

氏名	江口 直
所属	人獣共通感染症リサーチセンター 国際疫学部門
学年	博士課程 2 年
出張先	長崎大学
出張期間	6 月 7 日～ 6 月 9 日
目的	長崎大学との学生交流

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

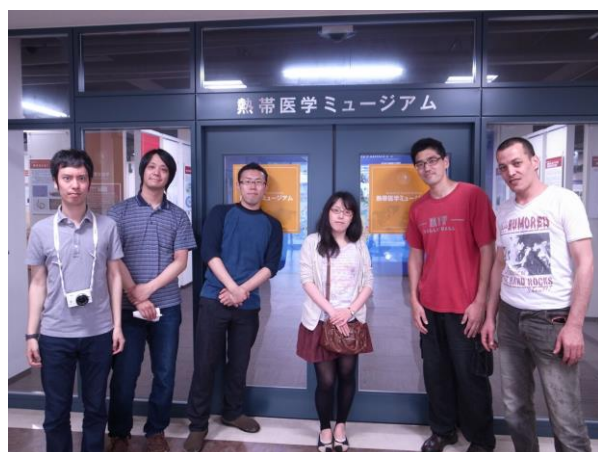
長崎大学と北海道大学のリーディングプログラムはお互いの弱点を補うために交流が行われている。今年の 2 月には長崎大学の学生 4 名が北海道大学の第 31 回リーディングプログレスにて発表した。今回の長崎大学との交流では北海道大学から堀内基広教授、学生から私を含め 5 名、事務から金田さんの計 7 名が参加した。6 月 7 日、9 日は移動日であったので交流があったのは 6 月 8 日のみである。交流は 10 時から英語の授業である Communication skills II class から始まった。



Communication skills II class の授業風景

約 40 名の中に混ざり、自己紹介から好きな食べ物、自分の好きな場所、将来のキャリアプランについて会話し、意見をまとめて発表した。長崎大学の学生とはほぼ初対面であったが、非常に気さくな方々で自然にグループに溶け込むことができた。彼らのキャリアプランは明確に社会貢献を目標とする人から製薬会社で勤めることを希望する人、まだ漠然とイメージを持つのみの人とそれぞれであったが、留学生は日本に来て研究を行うことを選んだ分やはり信念なり強い熱意があった。長崎大学は地元の児童にも英語での交流をしており、劇や石鹼の作り方など簡単な科学の実験を教えて社会貢献も行っていた。北海道大学の授業と比較すると、人数が多く集団での授業

をメインに行っていたが、個人的には長崎大学の英語の授業の方が参加しやすく好ましく感じた。長崎大学の学生は東南アジアやアフリカの国々から留学している例が多く、75%が留学生であることを聞き、日本人の学生は獣医師が多い印象があった。昼食後は長崎大学の熱帯医学研究所を見学した。長崎大学ではケニアとベトナムに拠点があり感染症の制御に携わっている。主に研究内容はトリパノソーマやデング熱などの **Neglected Tropical Disease** や新興感染症の研究を行っていた。研究設備は非常に整っていて不足している研究機材がないのではと感ずるほどだった。長崎大学ではラボを年間契約で貸し出しており外部の企業も入りやすい環境を作っていた。研究所の見学後に熱帯医学ミュージアムに訪れた。この施設では熱帯病に関する概説パネル、寄生虫、細菌、ウイルス、病原媒介昆虫、危険動物などの標本を展示し、少人数に対する視聴覚コーナーを設けていた。



熱帯医学ミュージアムにて

昨年のエボラアウトブレイク以降日本で始めて BSL4 を動かせるように努めているとの話を伺った。個人の感想としてはエボラウイルスが日本に入ってくる危険性を考えると BSL4 の施設は必要であり、設置における安全性も問題ないように感じる。しかし実現には近隣住民の反対からやはり難しいようである。可能であれば今後 5 年程度で設立・稼働させたいとの話であった。熱帯医学ミュージアムの見学が終わったあとは長崎大学と北海道大学の学生のプログレスミーティングを行った。1 人あたり 10 分の発表時間で 3 分の質疑応答時間を設けてあり発表者は全部で 7 名。ほとんどの人が感染症の研究を行っており、背景が近いこともあり活発な質問が飛んでいた。長崎大学では定期的なプログレスは開かれていないがこの機会から定期的な発表を検討したいと仰っていた。プログレスは知人の実験進行状況を知る良い機会でありモチベーションにつながるので良い機会だと感じている。私の講演のときは拙い英語での発表であったがみな真剣に聴講してくださり、寄生虫を研究している学生からウイルスの性状を知らなければ出ない鋭い質問が飛んできて生徒の質の高さが垣間見え

た。



プログレスの講演（左）と長崎大学の皆様（右）

プログレス後には懇親会を開いてくださり、学部生も含めて盛大に歓迎してくださった。会は2時間であったが会話が弾み時間があっという間に過ぎてしまった。連絡先の交換をして研究者同志が増えたことをうれしく思う。短い交流期間であったが非常に有意義な時間を過ごせた。

今回の学生交流から他大学の研究成果や英語のコミュニケーションスキルから刺激を受けさらに精進する気持ちと北海道大学であったからこそ感染症以外にも臨床や生化学などの自分の専門分野以外の話を多く聞く機会がある。この現状は貴重なものであると改めて感じた。おそらく北海道大学以外の院生ではこのような他分野にまたがる発表を聞くことは無かっただろうし、またわからない基礎的な内容を気にせず聞けるような機会も無かっただろう。このような機会を与えてくださったリーディングプログラムの関係者皆様に感謝の意を表します。

指導教員確認欄	所属・職・氏名： 人獣共通感染症リサーチセンター 国際疫学部門 教授 高田 礼人 印
---------	--

※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp